書物の衣装からテクストを読む：
The Gentlemans Academie(1595)をめぐって*

向井　毅

書物は特定の読み手の参入を受けた段階でそれ独自の読書空間のなかにおかれ、一人の読者とのインタラクションを通して固有の空間がつくりあげられてゆきます。しかし書物には、読み手と出会う前にモノとして形をなす段階で、すでにそれ独自の読書空間が用意されているといえます。あらかじめ形をなすこのような読書のコンテクストを、いわゆる『聖オルバンズの書』(The Book of St. Albans)と呼びならわされている作品をとりあげて、考えてみたいと思います。

我々が想定するのは1595年の秋のこと。この年の夏、出版されたばかりの本（書籍業組合への登録は8月13日）を一人の読者がセント・ポール寺院の境内にある書店で購入する姿です。本の判型は今にいう四つ折り本。印刷したのはValentines Sims、書店はHumfrey Lownesです。書物の「標題」は、写真（1）のタイトルページに見るように、

The Gentelmans Academie.
OR,
The Booke of S. Albans:

であり、この本はまた「聖オルバンズの書」という別名を持つことが記されています。さらに付帯的な説明として、本書は「鷹狩り(Hawking)」、「狩りの用語(Termes of Hunting)」、「紋章(Armorie)」を扱う３部立ての構成であること、元々、1486 年にジュリアナ・バーンズにより編纂されたことが併せて示されています。同時に、このたびG.M.なる人物によりあらたに編集がくわえられ、改訂されたことが顧客の目をひくよう字体を変えて書きそえられています。また、G.M.のイニシャルを付した「序文」には、1）紳士の教育に欠かせない3H(Hawking, Hunting, and Heraldry)を扱う必携の書であること、2）St. Albansで出版された本は今や稀覯本となり、入手しがたいその内容を今ここに蘇らせたこと、3）平易な言葉づかいに書きあらためたこと、などが述べられています。本を手にした若い客なら自ら紳士のたしなみをつけるために、あるいは年輩の客なら子弟の紳士教育のために、この本を手にしたことでしょう。

写真（１）The Gentelmans Academie(1486)のタイトルページ

写真（２）ウィンキン・ド・ウォード版The Book of St. Albans(1496)

序文は1486年の初版以来、本書が再版されていないかのような印象をあたえています。しかし実は1595年版は初版から数えて13度目の版であります。この出版史とりわけ本づくりのあり様を比較・通覧すれば、各版に意図された出版のねらい、読者層などが浮かんできます。

図(1)　The Book of St. Albans（『聖オルバンズの書』）出版史

				Hawking	Hunting	Blowing	Fishing	Coat-Armour	Blasing of Arms
1.	1486	St Albans STC3308	二折	√	√			√	√
2.	1496	De Worde STC 3309	二折	√	√		√	√	√
3.	1518?	De Worde STC 3309.5	四折	√	√		√		
4.	1547?	W. Copland STC 3310	四折	√	√		√		
5.	c.1550	W. Powell STC 3310.5	四折	√	√	√	√		
6.	1556	W. Copland STC 3310.7	四折	√	√	√	√		
7.	1556?	W. Copland STC 3312	四折	√	√	√	√		
8.	1558?	W. Copland STC 3312.3	四折	√	√	√	√		
9.	1560?	W. Copland STC 3312.5	四折	√	√	√	√		
10.	1565?	W. Copland STC 3312.7	四折	√	√	√	√		
11.	1586	E. Allde STC 3313	四折	√	√	√	√		
12.	no date	W. Copland STC 3313.7	四折		?				
13.	1595	V. Sims STC 3314 (Academie)	四折	√	√			√	√
14.	1596	W. Falkner STC 12412	四折	√	√	√	√		
15.	1614	T. Snowdon STC 21520	四折	√	√	√	√		

1486 年の初版は 2 折の大型本であり、英国の印刷揺籃期にあってはきわめてまれな、黒、赤、青、黄の多色刷りです。1496 年のド・ウォード版も同様に 2 折で、黒に赤と青のインクを使った多色刷りです。くわえて紳士にとって第 3 のスポーツともいうべき「魚釣りの手引き書」をさまざまな小道具のイラストとともに本書の中に挿入しています。「単独で釣りの書を出版すれば、本来、必要な人たちの手元に届かない」というのが印刷家のあげる理由です。さらに興味ぶかいことは、この版は現在 10 部あまり残っていますが、そのうちの 2 つ、大英図書館とマンチェスターJohn Rylands University Libraryのコピーにおいては印刷が羊皮紙にほどこされているのです。1496 年のド・ウォード版は、たとえば王侯につらなる読者を想定した本の作りこみが

おこなわれたと考えることができそうです。

ド・ウォードは20年あまり後の1518(?)年に再版を出します。しかし、この版からは「紋章の書」は削除され、かわりに1496年版において挿入された「魚釣りの書」が標題に明示されます。本の判型は4折の小型本です。かつてド・ウォードのもとでロイヤル・ブックとなった『聖オルバンズの書』は、同じ印刷家の手により実用の書に位落ちしたのです。以後、1595年のG.M.版にいたるまで「紋章の書」の復活をみることができません。この間に、1547(?)年のW. コップランド版において、既存の本文の内容にてらして「鷹の病の治療法」があらたに標題において言及されます。また、1550 年のパウエル版においては「猟犬と笛」が本文（「狩猟の書」の後）に挿入されるとともに、標題にも明示され、一般実用書としての充実がはかられています。

The Gentlemans Academie は、その標題が示唆するとおり、ほぼ1世紀もの長きにわたり実用書の系譜におかれた『聖オルバンズの書』を、紳士教育のための啓蒙書への移しかえが試みられた書であるといえるでしょうか。本のつくりを観察してみましょう。

Collation: A^4-G^4, I^4, K^4, L^2, M^4-T^4, V^4, X^4, Y^4, Aa^4-Dd^4; 98 leaves

$A1^{ab}$: blank（白紙）

$A2^a$: title page for the whole book "**The Gentlemans Academie**."（本全体のタイトルページ）

$A3^a$-$A4^a$: prologue to the whole book ("To the Gentlemen of England: /and all the good fellowship/ of Huntsmen and/ Falconers.")（本全体の序文）

$A4^b$: blank（白紙）

$B1^a$-$E3^a$: hawking section ("discourse of Hawking")（鷹狩りの書）

$E3^b$-$G4^a$: medicine section ("How the Frounce commeth, and/ a medicine therefore.")（治療の書）

$I1^a$: title page for the hunting section "**TREATISE of Hunting**."（「狩りの書」を導くタイトルページ）

$I1^b$: blank（白紙）

$I2^a$-$L1^a$: hunting section ("The Booke of Hunting)（狩りの書）

$L1^b$-$L2^a$: gap-filler ("Certaine proper terrmes belonging/ to all chace.")（埋め草）

$L2^b$: blank（白紙）

$M1^a$: title page for the armory section "**THE BOOKE of Armorie**."（紋章の書）

$M1^b$: blank（白紙）

$M2^a$-$M2^b$: prologue for the armory section ("The Preface.")（「紋章の書」を導くタイトルページ）

$M3^a$-$P2^a$: the first part of the armory section ("Incipit Liber Armorum.")（「紋章の書」第1部）

$P2^b$: blank（白紙）

$P3^a$-$Q2^a$: Willoughby argument ("The title of Barons growne in Eng-/ land by discent to the daughters/ and heires thereof.")（挿入文書）

$Q2^b$: blank（白紙）

$Q3^a$-$Dd3^a$: the second part of the armory section ("Here beginneth the Blazing/ of Armes.")（「紋章の書」第2部）

$Dd3^b$-$Dd4^b$: blank（白紙）

この書の印刷面のうち、本文以外に、各ページ上部に欄外標題(Headline)としてイタリック体による The Gentlemans Academie が、見開き右ページの下中ほどに丁付け記号が、右上隅にはフォリオ番号が、それぞれ記されています。興味ぶかいことは、初版とくらべて本文に遺漏がないにもかかわらず、丁付記号のうち4葉で構成されているはずの折丁[H]が欠落していること、くわえてフォリオ・ナンバーに不連続が観察されることです。元来、丁付記号とフォリオ・ナ

ンバーは、印刷過程において、割付けと紙折りから製本にいたる作業過程において求められた職人のための工夫です。したがって、書物の中心に固定される本文には直接に影響しない、周辺のミスとうち捨てることができるかもしれません。しかしなぜこのような過ちが生じたのでしょうか。フォリオ番号に限定して考えてみたいと思います。

先の書誌記述をもう一度見てみましょう。2ヶ所に問題があります。一つはフォリオ番号39–40の欠落(折記号でいえば L3, L4)です。1486年の初版では「狩りの書」が終わり、この折丁の余白に埋め草として2段組で印刷されていた「獣と鳥に関する用語(‘The Compaynys of beestys and fowlys’)」(初版 sig. f6ª–f8ª；5ページ分。f8ᵇは白紙)が、1595年のG.M.版において取捨選択され、一部のリストだけが大きな活字を用いて1段組で印行されています。印刷現場においては、初版にあるすべてのリストを印刷するものと考えてページ見積もりしたものの、実際にはG.M.こと Gervase Markham の編集をへて植字工のもとに届けられた原稿は、刷り上がりで2ページ分(sig L1ᵇ–L2ª; fols. 37–38)にしかならなかったということでしょう。リストの後半部が、今はない fols. 39—40 [sig. L3, L4]にも印刷されたが、それがなんらかの理由で欠落したという可能性は考えられません。リストが印字された2つのページのうち、fol. 38ª（つまり38のオモテ面）に印刷された第2ページ目のリストは、紙面の上半分のところで終了している事実からそのことを裏づけることができます。ちなみに fol. 38ᵇは白紙です。

折丁Lの印刷と紙折りの過程として次の2つが考えられます。本の判型は4折版ですから、一枚の全紙から4枚のフォリオ・ページが作られます。図(2)に見るように、全紙のオモテ・ウラ面上半分に、白紙で印刷される39と40のフォリオ・ページが置かれ、紙折りの段階でこの箇所が裁断され、そして除去された後、製本に向けて並べられたのが一つ。

図(2)　組版その1

L4ᵇ ⑧	(fol. 39) L3ª ⑤
L1ª (fol. 37) ① 「狩りの書」終ワリ	L2ᵇ ④ (白紙)

← 削除

(折丁[L]オモテ)

L3ᵇ ⑥	(fol. 40) L4ª ⑦
L2ª (fol. 38) ③ 「リスト」終ワリ	L1ᵇ ② 「リスト」始マリ

← 削除

(折丁[L]ウラ)

いま一つは、図(3)に見るように、通常とは異なる組版をおこない、オモテ・ウラの各面に37と38の印刷面が2組ずつ印刷されるものです。もちろんこのような印刷方法が可能なのは全紙の左右半分ずつを2度に分けてプレスする当時の「2度引き」を想定してのことです。[1]

図(3)　組版その2

L2[b] ④ (白紙)	
L1[a] (fol. 37) ① 「狩りの書」終ワリ	

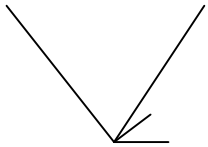
(折丁[L]オモテ)

	(fol. 38) L2[a] ③ 「リスト」終ワリ
	L1[b] ② 「リスト」始マリ

(折丁[L]ウラ)

もし図(2)の方法により印刷されたとすれば、折丁Ｌの糸綴じは図(4)のようになるはずですが、現存コピーには紙を折った後の切り残しは残っていません。つまり、折丁Ｌは組版のレイアウトを変更し、図(3)のような印刷方法を採ったと考えられるのです。

図(4)　組版その１による折丁Ｌの構成



ではなぜ39と40のフォリオ・ページがないのでしょうか。それはこの書物の出版を迅速に進めるために、複数の印刷機を同時に動かしながら、植字、組版、そして印刷を行ったからだと想像されます。折丁Ｌを組み上げるときには、次の折丁Ｍで始まる「紋章の書」(“THE BOOKE of Armorie.”)は別のグループの職人たちにより、すでに印刷されていたはずです。

われわれの想像力を大いにかきたてるのはいま一つのページ欠陥です。フォリオ50からの番号を丁付記号と一緒にしばらく並べてみましょう。

fol.	49,	50,	**51**,	52,	53,	54,	**55**,	56,	53,	58,	**55**,	60,	57,	58,	59,	60
sig.	01	02	03	04	P1	P2	P3	P4	Q1	Q2	Q3	Q4	R1	R2	R3	R4

注目すべきは55番が2度くり返されることです。2回目の55の後は、直後の60を除けば57, 58, 59、…と、4 つのズレをともないながらも番号が最後まで順序正しく振られています。この箇所で何かが印刷現場に混乱を引きおこしたのでしょう。なぜ55が2度現れるのでしょうか。sig. P2 (つまり folio 54)のすぐ後に、現在の sig. Q3 つまり第 2 番目のフォリオ・ナンバー55が続いていれば、本文が切れ目なく1486年の初版どおりに続くのです。一つの解釈を試みたいと思います。植字工たちはすでに幾ページ分かのテクストを組みあげていたはずです。そして4折本の配置にしたがって折丁Ｐのオモテ面を印刷すべく、フォリオ番号の53と55、丁付記号

の P1 と P3 を割りふったうえで 4 ページ分の活字をかたく縛り、印刷機の上にならべるところまで作業が進んだのでしょう。この時点では、現在の第 2 番目の 55 には P3 の折り記号が植字されていたはずです。まさに印刷にかかろうとするその時に、印刷現場に編者のあらたな本文追加の意向が主張をはじめたのだと思います。実際にこの時点で追加本文が届けられたのかもしれませんし、すでに編者の原稿が現場に届けられていたこと思いだし、印刷作業の一時中止をした可能性も考えられます。

挿入場所は、この G.M.版において復活した「紋章の書」の第 1 部終わりと第 2 部‘ Blazinge of armes’の始まりとの間です。第 1 部を終えるにあたって sig. P2[a] に添えられた巻尾語(explicit)には、下記に示すとおり、初版に従って第 2 部の‘ Blazinge of armes’がすぐ後に続くことが予告されているだけであり、新たに挿入される文書への言及はありません。突然の強い力が働いたようです。

> Here endeth the most speciall things of the book of the genealogie of coate of armours, the true insearcher, to displaie gentlemen from churles, and nowe shall follow, the exact booke of blasing of all maner of armes whatsoeuer, both in latin, French, and english.
>
> Explicit prima pars. (sig. P2[a])

挿入された本文にひき続き先ほどのフォリオ 55 の紙面が組みつけ台の上に置かれたとき、折丁記号は新しく差しかえたもののフォリオ番号は不用意にも 55 のままにしたために、それ以降は挿入された４枚分ずつずれて番号がふられたものと解釈されます。

では新しい 55、それに続く 56，57（誤って 53 がふられている），58 のフォリオ・ページ面にはいかなる文書が挿入・印刷されたのでしょうか。それは‘ The title of Barons growne in England by discent to the daughters and heires thereof.’の標題のもとに、女性の代をへて継承されたウィロビー家の爵位の正当性に関する言説です。

過去 100 年もの間、『聖オルバンズの書』から紋章学の項が削除されつづけたのはその内容ゆえであり、実用の書にはあまりにも高踏であったからでしょう。Markham はそれを復活させたうえで、紋章の起源をあつかう第 1 部と紋章の形態を記述する第 2 部との間に、ウィロビー家の称号にまつわる言説をしのばせたのです。権威と伝統をふまえて記述された紋章学の書にさし挟まれた文書は、英国において爵位が女性の血をへて継承されたことをウィリアム１世からヘンリー７世の時代にいたる事例をあげて説明するとともに(sig. p3[a] -P4[b])、諸外国における該当例を列挙し(sig. P4[b] -Q1[b])、もって個別事例としてウィロビー家の爵位継承の正当性を論じているのです。写真(3)の印刷面にある大文字 A に注目してみましょう。諸外国における事例の後、ウィロビー家の爵位に転じるための見出し 5 行分をインデントし、3 行相当のイニシャル文字をもちいて当家の説明をはじめます。活字の選択、句読点、文章の配列などの視覚的工夫のなかに、書き手の息づかいと力みを感じることも可能です。

写真(3)　sig. Q1[b] の印刷面

インデントされた見出しの４行目から５行目にかけて‘the Baronies of Willoughby and Eresby’の呼称が書かれています。当時の読者なら誰もが第 13 代 Lord Willoughby de Eresby を思い描いたことでしょう。彼は父 Richard Bertie が求めてもかなわなかったウィロビー男爵の称号を晴れ

て認められました。[2]ウィロビー家は過去に3度、直系の男子相続者がいないことを理由にバロネスの称号を持った女性をへて、その夫、あるいは子に領地と爵位の受けわたしが行われました。図(5)のウィロビー家系図において、括弧でくくった女性がその例です。しかしこうした爵位の継承もその実情は規則・慣習によるとはいえ、かならずしも保証されていたわけではありません。当時の文書には"in the right of his wife/mother"（「妻/母の権利によって」）と並び"by the courtesy of Queen/England"（「女王/イングランドの好意によりて」）という相対立する表現が用いられるゆえんです。[3]挿入文書は、第11代ウィロビー卿の逝去により、一人娘のKatherine（サフォーク公爵夫人）が爵位を継承しバロネス・ウィロビーを名のったこと、そのおり、叔父のChristopher Willoughbyが男系継承者として爵位の継承を主張したが、キャサリンに正当性ありとの判断がくだされたこと、この2点をもって締めくくられます。爵位を継承し今は華々しく活躍するPeregrineには直接触れるところがありません。見出しのWilloughby and Erezsbyも単なる呼称による表記でした。本文の記述も当のペレグリン・バーティまで言いおよばず、母のキャサリンで終えています。この＜控えめな記述＞と＜暴力的な書物への介入＞との間にいったい何が隠れているのか、われわれ読み手の想像力がためされるところです。

図(5)のウィロビー家系図

冒頭で述べた顧客は自分のために、あるいは子弟のために、紳士教育の書として1595年版『聖オルバンズの書』を手に取ったことでしょう。しかしその書物は、読者の手に届く前に、編者Gervase Markhamが貴族の間で関心の的であったウィロビー家の伯位継承問題を取りあげ、紳士教育の書に名を借りて同家の正当性を展開し、もって庇護を得る意図が込められていたと言えそうです。[4]本書の内容が備えもつ一般・普遍性のなかに、特殊・個別性を忍びこませ、活版印刷というマス・プロダクションにより拡大・流布を図ったといえましょう。フォリオ番号の打ち誤りという一見取るにたりない書物の「装い」に、編者による本文介入とこの書物を生んだ時代の歴史が織りこまれているのです。

---

* 本稿は、日本英文学会中世部門のシンポジウム「空間を読む―中世文学と書物」（第74回全国大会、2002年5月26日、北星学園大学）において提供した話題を、話し口調をそのままに活字化するものである。本シンポジウムは、松田隆美教授（慶応義塾大学）が次のような趣旨のもとに企画と立案をおこない、実施された。

> 歴史形態の書物を手に取るとき、我々は、装丁、タイトルページ、挿絵、ページレイアウトなどを介して初めてテクスト本文に到達する。その意味で、読書とはまさに空間的拡がりを持つ行為であるが、同時に書物の制作者（編纂者、写字生、印刷業者など）からみても、テクストを選択してそれらを具体的に書物へと仕立ててゆくプロセスは、テクストの周囲に特定の文脈を構築してゆく、立体的な作業であるといえる。
>
> このようにテクスト本文を前後左右から取り囲んでいる、空間的かつ文脈適所要素を、Gèrard Genetteはparatexteと呼んだ。それがテクストの読みに与えうる影響は、書物が、作者、編纂者、写字生、挿絵画家、印刷業者などの共同作業の産物であった、写本や初期印刷本時代においてことさら顕著であったと考えられる。
>
> このシンポジウムでは、１３－１６世紀に制作された写本と印刷本を具体的に検討しつつ、読者をテクストへと導いてゆくこれらのparatextualな諸要素が、テクストの生産と受容においていかに寄与しているかを明らかにし、個々の書物の特性を同時代の文脈の中で描き出す。

写本から本テーマに迫ったのは、和田葉子氏（関西大学）「写本のジグソーパズルを解くー

London, British Library MS. Harley 913 復元」と松田隆美氏の「テクストとイメージのレイヤーを重ねるーME 宗教文学アンソロジーにおけるイメージの機能」であり、初期印刷本を対象としたのが徳永聡子氏（慶応大学）の「印刷本と読者―*Troilus and Criseyde* の挿絵を中心に」と筆者の「折丁、フォリオ・ナンバーの乱れからテクストを読むー書物を割くのはバースの女房だけか」であった。

本稿に触れる、挿入された「歴史文書」に関しては、別稿 ‘An Appropriation of the *Book of St Albans* by the *Gentlemans Academie*: Some Bibliographical Considerations’（印刷中）において詳しく論じた。

[1] 印刷機に改良がくわえられ、活字の組み付け台を載せる厚板(plank)が可動式になった。その結果、全紙に相当する「版(forme)」（２折では２ページ分、４折では４ページ分）が一度に台上に載り、まず左半紙分がプレスされ、その後厚板を移動して右半紙が印刷された。この工程を「２度引き(two pulls)」という。

[2]父の Richard Bertie は妻キャサリンの権利を理由に１５７０年にウィロビーの爵位継承を申し出る。コミッショナーの判断は要求を正当と認めたが、エリザベス女王は称号付与を逡巡した。リチャードは、息子 Peregrine への権利移譲の可能性までもが否定されることをおそれ、否決が決定されるよりも棚上げ状態をむしろ歓迎したという。The Complete Peerage or a History of the House of Lords and All its Members from the Earliest Times, ed. by G. E. C., revised and much enlarged by G. H. White (London, 1959), xii, pt. ii, 658-82, esp. p. 675.

[3] J. Horace Round, *Peerage and Pedigree: Studies in Peerage Law and Family History* (London, 1910), p. 9 and p. 19.

[4] 編者 Markham は後の作品 Honouur in his Perfection (1624)の献辞の中で、次のように特別な称辞をそえてウィロビー家に言及している。

Henry　Earl of Oxenford,
Henry earl of Southampton,
Robert earl of Essex;
The euer praiseworthy and much honoured Lord,
Robert barite, Lord Willoughby,
of Eresby; With a Brief Cronology
of Theirs, and their Aunce-
stours Actions

主要参考文献

Facsimiles:

The Book of Saint Albans by Dame Juliana Berners, 1486.　Introduction by William Blades. London. 1881.

The Boke of St. Albans, sigs. a2r-f8r.(Hawking and Hunting).　Introduction by Rachel Hands. Oxford. 1975.

The Book containing the Treatise of Hawking, Hunting, Coat-Arms, Fishing and Blasing of Arms by W. de Worde (1496). Introduction by Joseph Haslewood. London. 1810.

A Treatise of Fysshunge with an Angle: A Facsimile of the book printed by Wynkyn de Worde in 1496. Introduction by M. G. Watkins. London. 1894.

Haking, Hunting, Fouling and Fishing, with the true measures of blowing. Newly Collected by W. G. Faulkner, 1596: A Facsimile. Amsterdam. 1972.

A Iewell for Gentrie. Now newly published, and beautified with all the rarest experimented that are knowne or

practiced at this Day [by T. Snowdon]: A facsimile. Amsterdam. 1977.

Reference Books:

Cokayne, George E., The Complete Peerage or a History of the House of Lords and All its Members from the Earliest Times. London 1926.

Goff, Celilie, A Woman of the Tudor Age. London. 1930.

Fitzherbert, Reginald H. C., 'The Authorship of the "Book of Husbandry" and the "Book of Surveying,"' The English Historical Review, 12 (1897), 225-36.

Hands, Rachel. 'Juliana Berners and the Boke of St. Albans,' RES, n.s. 18 (1967), 373-86.

_____. 'Sir Tristram's Boke of Hunting: the case for the Rawlinson MS,' Archive, 210 (1973), 58-74.

Markham, Gervase, Honour in his perfection: or a treatise in commendation of the Vertues and Renouned Henry Earle of Oxford, …Lord Willoughby of Eresby. London. 1624. [treats Lord Willoughby]

_____. Countrey Contentments. London. 1615. [a treatise on gentlemen's sports and housewives' duties]

Oschinsky, D., ed. Walter of Henley and Other Treatises in Estate management and Accounting. Oxford. 1971.

Pafort, Eloise, 'Notes on the Wynkyn de Worde Edition of the Boke of St. Albans and its Separates,' Studies in Bibliography, 5 (1952-3), 43-52.

Poynter, Frederick, A Bibliography of Gervase Markham 1568?-1637. Oxford. 1962.

Round, J. Horace, Peerage and Pedigree: Stduies in Peerage Law and Family History. London. 1910.

Read, Evelyn, Catherine Ducchess of Suffolk: A Portrait. London. 1962.

Arber, Edwards, ed. A Transcript of the Register of the Company of Stationers of London 1554-1640 AD. 5 vols. London and Bermigham. 1875-94. [gives information on the entry of the Academy to the Stationers Company)

Duff, E. Gordon, English Printing in Vellum to the end of the 1600. Aberdeen. 1902.

McKerrow, R. B., ed. A Dictionary of Printers and Booksellers 1557-1640. London. 1910.